

パリ・リヨン驛

中島八十一

廿餘年以前夏に余一家を上げて短時日パリに居りたり。當時よりいい加減なる性質有する息子のうち一人はパリよりイタリア經てドイツに向ふと言ふ。されば前日にTGVの指定席豫約すべしと勸むるもこの提案黙殺す。いづくより得たりや妙に持ちたる歐洲への妙な自信あるが故なり。自信にあらざして物事に當たるにつとに粗なると云ふ他なし。

翌朝リヨン驛に特急列車早くも入線したるにこの御仁未だ出札口に並び居りたり。余十メートルのあなたにて自らの出番待ちたり。程なくしてその時訪れたり。大音聲にて喚く聲の主は面目無く余の息子なり。「おい、来てくれ」。さもあらなむと思ひつつ出札口に歩み寄れば驛員余に向き直りて指定券贖ふは義務なりと述ぶ。いかにもと余うなづきてトリノまで一枚求めたり。顧みればこの時期未だスマホ無き時代なれば、その後の消息はすべてこの男のみやげ話に拠る。

ひと月をイタリアにて過せるかの男子、ローマよりミュンヘンに至る國際列車に乗りたり。その後日本に戻りて只今眼前に坐りたる彼よりイタリア滞在にて如何やうなる蹉跎踏みたりや訊きたくもなし、ただ一方的に語るに任せここに記すことにせむ。

ローマを離れたるイタリア國鐵の列車歩みのろきこと、速度こそ鈍なるにはあらね、ただ列車またイタリア人氣質を真似て悠長なりといふの外なし。犬の氣性飼主に似ると言はずや。立ち寄る驛ごとに豫定時刻より遅るること甚だし。何人もイタリアなるものにいささかなりと觸れたらむにはかくなるものと鷹揚に構ふる術は身に附くらむ。ミュンヘンまで七時間半。遅延に繼ぐ遅延、累ねればいかほどの時間になるやと列車の中に居る間不愉快さに苛まれたり。いつしか周圍を山々に圍まれ、その險しさ次第に増しアルプスに近づきたり。國際列車なれば停車驛少なきに、やをらさびれたる驛に停車す。轍の音のみかまびすし、これぞイタリア・オーストリー國境なる。これより列車車輛はそのままにして管轄のみイタリア國鐵よりドイツ國鐵に移行したり。車輛隔つる扉開け隣の車輛より三人のドイツ人車掌入り來りて乗客ごとに運行時刻表を渡したり。再び走り出したる列車、同じ列車とは思ひ難きほどに居住まひ正して終點を目指し始めたり。運行表に記す通りに中途驛に到着するは述ぶるまでもなし。

余この話にいたく興味そそれ廿年經たる今日までに幾度となく職場の同僚、部下ともに話したり。四十歳に至らざる年ごろの職員おしなべてドイツ譽め、中には本朝もドイツの如くあるべしと息巻く者もあり。他方、四十歳を超ゆる邊りよりそが反應は一轉す。イタリ

ア良きところにあらずや、と。しからは余はいづれか選ばむ。

（令和八年二月十日受附）